

## 山形新聞 4月4日朝刊『オピニオン』欄

### 壮観な大法要

壮観だった。読経の声が響き、本堂を埋めた参拝者ら約 700 人が一斉に手を合わせる。山梨県身延町の日蓮宗総本山、身延山久遠寺で 3 月 17 日に行われた大法要。多人数での団体参拝は決して珍しくないが、これが一寺院の行事という点に驚かされる。

法要を行ったのは新潟市西蒲区にある角田山妙光寺。日蓮が佐渡配流の際に立ち寄ったというゆかりの地にあり、創建は 1313 年。700 年という節目の年、住職の小川英爾さん(60)が記念行事として思いついたのが、檀(だん)信徒や縁のある 700 人を集めての総本山での大法要だった。

ただ、地方の一寺院が行うのは異例中の異例。「無理だ」と言われたが、周囲を巻き込んで入念な準備を行い、ホテルで前夜祭まで開き、法要を成功させた。寺に関する新しいアイデアを次々と形にしてきた、小川さんならではの実行力だ。

都市部にあるわけでもなく、財政的に恵まれてもいなかった寺を継いだのは 40 年近く前。1989 年に全国に先駆けて永代供養墓の安穩廟(びょう)を始めた。宗派を問わず、血縁による跡継ぎを必要としない新しい墓は、数多くの人から支持されて会員は全国に広がり、墓を縁とした緩やかコミュニティが形成されている。

檀信徒との関係も強化した。葬送だけでなく、終末期の苦しみ、家族の悩み、相続などの相談も受け、ネットワークを駆使して専門家の紹介も行う。毎年、寺でイベントを開催、地域活性化にも一役買っている。

旧来の「家」意識と密接に結びついた檀家制度を守るのではなく、寺が現代において果たす役割とは何かを求め続けてきた活動。海外から、日本各地から、記念法要に集まった人々に接し、これからを生きる寺の一つの姿を見た気がした。(志)

\* 共同通信配信の記事で、全国の地方紙に掲載されました。